

鹿児島大学法文学部紀要
「人文学科論集」第84号(二〇一七)別刷
二〇一七年二月発行

『東俗叢』について

大田由紀夫

『東俗叢』について

大田 由紀 夫

一、はじめに

一九四二年九月、日本占領下の北京において東方民俗研究会（以下「研究会」と記す）という学術団体が、北京在住の邦人たちにより結成される（設立認可は一九四三年七月、発会式は同年一〇月。のち日本敗戦で消滅）。戦前・戦中期における日本民俗学の海外展開に関する議論（大東亜民俗学」をめぐる論争）が行われるなか、北京で生まれた「研究会」も言及されている（川村一九九六など）。この会の成立経緯に関しては、その有力会員だった沢田瑞穂（一九二二～二〇〇二）が次の文章で端的に述べている。

昭和十五年の春であった。当時北京に寓していた邦人たちのうち、かの地の風物民俗に興味をもつもの同志が、いつしか一群をつくるようになり、民風社などという、きいたふうな会名をつけて、まず身近な北京を中心とする諸地方の民俗資料を、従来の「支那通」式ではなく、できるだけ学問的な観点と方法で採集し、やがて遠隔の地にも及ぼそうという、まずは大陸民俗研究といった計画を立てた。……その後、民風社は日ましに隆盛に赴き、新会員も加わったので、昭和十七年九月には東方民俗研究会と改称し、北京東昌胡同にあった東方文化総委員会主任の橋川時雄先生を会長とし、正式に北京の学術団体として新発足をした。〈沢田一九六五、一～七頁〉

また、当時のマスコミによる「研究会」の紹介文もあり、それには会の概要が簡潔に説明されているので、以下に抜粋する。

東方民俗研究会 中華民国を中心として東亜諸民族の言語・風俗・習慣・好尚・信仰などの科学的研究の発達に資するため昭和十八年七月民間有志によって北京に創立された……日本民俗学と同じ方法論で東方民俗の実体を把握せんとする同志が会の根幹をなし会員約八十名。主なる事業は毎月例会を開き会員の研究発表と東方民俗叢書の刊行であるが、随時会員が蒐集した民族参考資料の展覧および民俗研究に関する講演会も開催する。

〈東亜新報天津支社一九四四、社会文化篇五三頁〉
このように東方民俗研究会は、日本民俗学の手法に基づき、中国を中心とした「東方民俗」の研究を志向する人々が中心になり組織された団体であった、とひとまず捉えられる。そして存続期間の短さにも拘わらず、この会から生まれたいくつかの研究（多田貞一『北京地名誌』など）は、戦前期の貴重な業績として現在でも日・中で高く評価されており、また会員にも民俗学・歴史学・哲学など各分野で戦後活躍する人々が多数含まれるなど、「研究会」は学術的に軽視できない存在といえる。

ところが、その短命性、敗戦による混乱・忘却、それに伴う史料不足などのため、これまで「研究会」が考察の主題に据えられることはなかった。敗戦後、この会に参加していた人々の回顧的文章がいくつか公表されているものの（橋川一九六五、直江一九六七、沢田二〇〇六など）、その歴史の復元は長い間、未着手のまま放置されつづけたのである。

ただ、こうした状況にも近年、変化がみられる。柳田国男の愛弟子であり「民間伝承の会」編集長を長く務めた、橋浦泰雄（一八八八～

一九七九)が残した「橋浦泰雄関係文書」(以下「橋浦文書」と記す)に存在する「研究会」関連史料(直江広治の橋浦宛書簡など)を利用し^②、その活動にも論及する研究が相次いで現われ、会の実態が明らかになりつつある(鶴見二〇〇六c、王京二〇〇八)。とはいえ、これらの研究も日本民俗学(とりわけ柳田民俗学)の海外展開に主たる関心が置かれ、これに関連する限りで会が取り上げられるに過ぎず、「研究会」自体を俎上にのせ、その全容の復元が試みられている訳ではない。

現在に至るまで「研究会」が正面から研究されなかった原因の一つは、既述のように史料の決定的な不足にあった。わずか数年で消滅した短命性、また「外地」の研究団体であるため関連する記録・刊行物が日本に殆ど残されなかった史料残存の問題などが、基本史料の不足をもたらし、ひいてはその実態把握を著しく困難にした。よって、「研究会」に関する研究を少しでも前進させるためには、このような史料状況をまず改善していく必要がある。

さて、「研究会」には『東俗叢』という「機関誌」の存在していたことが知られている(沢田一九六五など)。だが、その現物が確認・紹介されたのを算聞にして知らない。ところが最近、筆者はこの雑誌が日本に現存することを知り、また現物を見える機会にも恵まれた。本稿は、筆者が閲覧した『東俗叢』の紹介とこれに関する若干の考察を通じ、前述の史料状況の改善に資することを目的としている。

二、所蔵状況

『東俗叢』に言及する同時代史料は管見の限り見当たらず、また会に関わった人々でこの雑誌に触れている者は殆どいない。わずかに、「研

究会」を回想した沢田瑞穂による一、二の文章中に『東俗叢』の名が見出せるだけで、ここから辛うじてその存在を知り得る程度である。

会の事業として、月一回の例会や、随時の講演会・民族資料展観・集団調査などのほか、機関誌『東俗叢』を発行し、北京新民印書館発行の月刊誌『月刊毎日』に会員が輪番で民俗関係の文章を発表し、また同じ新民印書館から東方民俗叢書として第一巻に故多田貞一の『北京地名志』を、第二巻に吉岡義豊の『白雲觀の道教』を刊行した。

〈沢田一九六五、七頁〉

昭和十九年五月末には再び北京に渡り、……東方民俗研究会の会員・幹事としても再び現地北京で動くことができるようになったのである。研究会は順調に活動していた。……月一回の例会は東昌胡同の研究所(北京人文科学研究所―引用者注)で開かれ、会員はもとより、時には日本からの著名な研究者も訪れた。……例会のほか執筆活動としては『東俗叢』と題するささやかな会報を発行し、また北京新民印書館発行の『月刊毎日』という邦文雑誌に会員が交替で民俗関係の文章を執筆した。

〈沢田二〇〇六、四三九頁〉

傍線部にあるように、『東俗叢』は「会報」・「機関誌」などと呼ばれ、「研究会」の活動実態を把握するためにはまず参照すべき基本史料といえる。にも拘わらず、『東俗叢』が一体どんな雑誌だったのかは従来まったく不明であった。そもそも、この雑誌が何号まで発行されたのかさえよく分かっていない。これは、『東俗叢』の所在を知る手掛かりが殆ど残されておらず、現物にアクセスできなかったことに起因している。たとえば、国内各種機関の所蔵図書に関する情報を提供する、国立情報学研究所のCinii Booksや国立国会図書館サーチ(NDL Search)を検索しても、

『東俗叢』は一切ヒットしない。

ところが既述のように、筆者は偶然にもその現物に出会えた。きっかけは、鳥取県立図書館郷土資料室が所蔵する「橋浦文書」を調査したところにある(二〇一五年八月)。この時、直江広治(一九一七〜一九四)からの橋浦宛書簡を閲覧するとともに、「研究会」幹事の多田貞一(一九〇五〜四五)の著書『北京地名誌』(新民印書館、一九四四年九月刊)も同文書内にあつたので、その閲覧を申請した。『北京地名誌』は、「研究会」の事業として企画された「東方民俗叢書」(以下「叢書」と記す)の一冊にしてその第一巻であり、敗戦直前の「外地」出版物のため、現在では稀覯本となっている³⁾。そして、筆者が閲覧した同館所蔵本に折り込まれていたのが、一九四四年九月二〇日発行の『東俗叢』第一号なのである【図一】。

実は筆者も同書を一部所持しているが、入手時これに『東俗叢』は付属していなかった。また、鳥取県立図書館の「橋浦文書」について鶴見太郎が作成した目録にも、この雑誌に関する記載は一切なかった(鶴見二〇〇六b)。このため、同館所蔵本からの『東俗叢』の出現は、筆者にとつて予想外の出来事であつた。

ちなみに、同館の「橋浦文書」には『北京地名誌』が二部あり(うち一部には「贈呈 著者」と記す献呈箋が挟まる)、両方とも第一号が折り込まれていた。加えて、第一号の刊記の左には「北京地名誌附録」という文字も記されている。これらの状況証拠から、「叢書」第一巻の『北京地名誌』は、『東俗叢』第一号を付録として添付するのが本来の姿であつたと考えられる。それが、付録として折り込まれていたからか、『東俗叢』は独立した刊行物と見做されず(あるいは見逃されて)、目録の記載よ

り漏れてしまったのだろう。

以上の事情が分かると、『東俗叢』という一風変わった誌名は、「東方民俗叢書」の略称に由来していたことが明瞭になる。また、こうした誌名が付けられた理由も、それが「叢書」の「附録」として発行された「月報」の類(『全集や叢書などの連続した出版物に別刷として添付される印刷物』)であつたからだと了解できる。「叢書」は第一期分として一二種の刊行を予定していたが(後述)、第二巻の吉岡義豊(一九一六〜七九)『白雲觀の道教』(一九四五年二月刊)が出たところで敗戦のため中断し、刊行は二冊に止まった(吉岡一九七七a)。よつて、その付録たる『東俗叢』も第二号をもつて終わつたとみてよいだろう。

こうした第一号発行の様相を踏まえれば、第二号を探す手掛かりは、「叢書」第二巻『白雲觀の道教』に求められる。幸いに国立国会図書館サーチで検索すると、それが香川県立図書館に一部所蔵されていることもすぐ判明した。そこで、この本を確認したところ(二〇一五年二月・二〇一六年三月)、予想どおり、第二号が付属していたのである。

香川県立図書館所蔵本は、同館「梅尾文庫」内の一冊である。梅尾文庫は、仏教美術研究者である梅尾祥瑞(一九二八〜八八)の蔵書二六一三冊が一九九三年にその遺族から同館に寄贈されたもので、密教学者である父親の梅尾祥雲(一八八一〜一九五三)の蔵書を核に、息子の祥瑞が発展させた宗教学・仏教芸術学の文献を中心とするコレクションである⁴⁾。文庫の基礎を築いた梅尾祥雲は、『白雲觀の道教』刊行時(一九四五年二月)、著者の吉岡が研究員となつていた真言宗喇嘛教研究所の所長であつた⁵⁾。おそらくこの繋がりから、同館所蔵本が祥瑞の所蔵に帰したものと推測される。

東俗叢

民衆に満足される眞理

を一つに絞って扱入れたばかりの挑が、今朝は驚かふからんで来た。如何にも感にたへたやうな表情をして「歳々年々人不同」人間の歴史がかうしたりズムで軋るばかりであつたとしたら、私どもの生のどこに堪ふべき

ものがある。そこに彼等の生命が存続するとして、たとひ彼等の胸一本を刻み得ても、それには彼等の凡てに満足さるべき眞理が表現されてゐるであらう。

學問は無情無義ではない。無情なる仕事ではない。絶えず過去を回顧し、歴史に反照して、いままでの自己の歪曲を、求めるの誤りを、正しき徑に返さうとする様な餘閑があつてはならない。私どもは、學問そのものの本質に向つてまづ體當りして眞理を求め、そのやり方であらねばならない。子を産むことを見習つてから學問の如に嫁いで来たのではない。學問の對象や方法の詮議をすませてからこの仕事に取組まうとするわけには行かぬ。願ふべきでない表現ではあるが、私どもは東方諸民族の一般民衆に満足され、承認されるべき眞理を追究するのである。今私諸同人が奮闘しつゝある東方民俗叢書の一冊一冊はこの眞理の表現に外ならない。

いまや兎脱英米は小顧にも敏敏に東方民族に迫つて来た。これを撃ちてしまふがために華北の鐵礦と石炭は溶銅爐の中で燃え尽きてをる。やがて生れ出る眞赤な鐵屑の幾條の流れを見つめる教師の眼底に尤も、それはまた眞理とも、同人にもあるのだ。

とつひに絞って扱入れたばかりの挑が、今朝は驚かふからんで来た。如何にも感にたへたやうな表情をして「歳々年々人不同」人間の歴史がかうしたりズムで軋るばかりであつたとしたら、私どもの生のどこに堪ふべき

昭和十九年九月十日印刷
昭和十九年九月二十日発行
「北京城」編輯部
編輯者 田中庄太郎
發行所 北京城内外各書局
發行所 新民印書館
北京東直門外北土城子路

東方民俗研究會會則

- 一、會名 本會ハ東方民俗研究會ト稱ス
- 二、目的 本會ハ中華民國及東亞諸民族ノ言語ノ風俗ノ習慣ノ信仰等ノ科學的研究ノ發達ニ資スルヲ以テ目的トス
- 三、會員 本會ハ東方民俗研究ノ同志ヲ以テ之ヲ組織ス、本會加入希望者ハ會員ノ推薦ニヨリ幹事ノ同意ヲ得ルモノトス、本會ハ左ノ常業ヲ實施ス
 - 一、集會 會員相互ノ連絡、研究ノ發表討論ノ爲メ毎月一國以上集會ヲ開ク
 - 二、編輯雜誌 月刊東方民俗ヲ發行シ會員ニ配布ス
 - 三、書籍刊行 東方民俗叢書ヲ刊行ス
 - 四、展覽會 臨時會員ヲ召集セル
- 四、事業
 - 一、集會 會員相互ノ連絡、研究ノ發表討論ノ爲メ毎月一國以上集會ヲ開ク
 - 二、編輯雜誌 月刊東方民俗ヲ發行シ會員ニ配布ス
 - 三、書籍刊行 東方民俗叢書ヲ刊行ス
 - 四、展覽會 臨時會員ヲ召集セル
- 五、役員 本會ハ會長一名、幹事長一名、幹事若干名ヲ置ク、本會ハ幹事ノ職學ヲ顧問ニ推薦スルコトアリ
- 六、會務 本會ノ會務ハ全テ幹事會ノ決議ニ依リ之ヲ遂行スルモノトス、幹事會ノ規約ハ別ニ之ヲ定ム
- 七、經費 本會ハ經費ハ會費、基金及有志者ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツルモノトス
- 八、事務所 本會ハ事務所ヲ當分北京市東直門一號東方文化事業總委員會内ニ設ク

セル民俗叢書委員
會長 田中庄太郎
幹事長 吉岡正巳
幹事 永井 清
石濱純太郎
別所孝太郎
折田信夫
折田國男
坂本龍男
周作人
藤川時雄
原田正巳
吉岡正巳
多田貞一
多田貞治
大中原信生
安藤聖生
澤田瑞穂

図1『東俗叢』第1号（鳥取県立図書館郷土資料室所蔵）

なお、鳥取県立図書館・香川県立図書館以外にも、『東俗叢』を所蔵する国内の機関がいまひとつ存在している。それが東京の成城大学民俗学研究所である。註2でも記した通り、ここにも「橋浦文書」が所蔵され、その中に『北京地名誌』（一部）が含まれる。そして成城大学所蔵本にも、やはり第一号が折り込まれていた。この結果、国内で所在が確認できる第一号を伴った三部の『北京地名誌』は、みなその出所が橋浦泰雄の旧蔵本となる。こうした来歴より判断すれば、北京の多田から東京の橋浦へは当初三部が送られ、このうちの二部が鳥取県立図書館へ、一部が成城大学へと分蔵されるに至ったとみられる。

以上、『東俗叢』の第一号・第二号は日本に現存することが明らかになった。ここまでのまとめとして、筆者が把握する『東俗叢』の国内所蔵状況を記すと、次の通りになる。

- 第一号・鳥取県立図書館郷土資料室「橋浦文書」（二部）、成城大学民俗学研究所「橋浦文書」（一部）
- 第二号・香川県立図書館「梅尾文庫」（一部）

三、概要

つづいて『東俗叢』の概要を発行順に紹介しよう。第一号は刊記が「昭和十九年九月二十日」とある。『北京地名誌』の刊行が「昭和十九年九月十日発行」なので、第一号はほぼ同時期に発行されたことになる。以下は本号の目次である。

『東俗叢』第一号・目次（全四頁。一九四四年九月二〇日発行）

「民衆に満足される真理」子孫

一頁上段

『東俗叢』について

東方民俗研究会会則

一頁下段

一、趣旨

二、会則

顧問、役員（会長・幹事長・幹事）氏名⁶

「支那茶の話」戸塚政慶

二頁

「楊柳青村」多田貞一

三頁

東方民俗記事

四頁上段

・昭和十八年度事業報告

一、十八年七月二日研究会設立許可

二、十月三日発会式並第一回講演会

三、十一月二十七八日第一回民俗展覧会

四、映画製作指導

五、調査の受託

六、研究発表

七、例会（一九四三年七月～一九四四年三月の例会記録）

八、出版契約（民俗叢書）

・昭和十八年度会計報告

一、収入金額

二、支出金額

三、差引残高

・東方民俗叢書刊行予定書目（二二種）

・会員消息

新民印書館刊行書の広告

四頁下段

つぎに第二号は、刊記に「昭和二十年二月二十日発行」と記されている

が、各頁の右肩には「昭和十九年十二月発行」とあり【図2】、発行時期の記載に食い違いがみられる（これについては後述）。本号の目次は次の通りである。

『東俗叢』第二号・目次（全四頁。一九四五年二月二〇日発行）

「信仰と環境」 沢田瑞穂	一頁上段
東方民俗研究会章の図	一頁上段
「社と会」 吉岡義豊	一頁下段
「東方民俗研究会発会式祝詞」 周作人	二頁上段
「信仰と環境」（承前） 沢田瑞穂	二頁下段
「信仰と環境」（承前） 沢田瑞穂	三頁上段
東方民俗研究会消息	三頁下段
・ 研究と報告（一九四三年七月～四四年一〇月の例会記録）	
・ 会員小倉東次氏逝去	
新民印書館刊行書の広告	四頁

図2 『東俗叢』第2号（香川県立図書館所蔵）

昭和十九年十二月二十日発行

「白雲閣の遺教附録」

印刷者 田中莊太郎

発行者 北京東門外北曉土路

發行所 新民印書館

北京東門外北曉土路

東俗叢

信仰と環境

澤田 瑞穂

北京には二郎廟とよばれる廟がほと二箇所ばかりある。最も知られてゐるのは東城燈市口東の二郎廟、現在でこそすつかり規模が縮小されて貧弱さはまる小廟となりはてゝあるが、唐代からあるといはれるほどの古廟で、場所が便利なせゐるか、月の朔望には参拜者ひきもきらず、ために線香なども狭い廟内に山と積まれて、景氣はなかなか好さうに見える。

もう一つの二郎廟は北京の西南郊にある。永定門を出て西方に曲ると、道は城壁外の護城河へ續く。多などこの邊を通つてみると、河に張りつめた厚い氷を、大勢の夫婦が適當な大きさに切つては石材でも搬ぶやうに引きずつて運搬してゐるのが見られる。

さて二郎廟はこのあたりより歩いてさほど遠からぬところに位置する。北京を出て豊台

の方へ走る鐵道線路のすぐ北側に建つてゐるのがそれである。入口に鐵製の大欄干を設けて西向きとしたのは、線路に面することを避けての新しい改變であることは疑ひない。これからの鑑定は、あへて風水先生を俵たすとも素人でも出来るのだが、考へてみると、どうも鐵道といふものは風水先生にとつては大敵らしい。北京の正陽門は東西兩方から鐵道が入りこんでゐるが、風水先生の説によると、「兩蛇咽喉に入る」ださうで、北京城の風水はこれで完全に破壊され、それ以來北京も倅なことはなくなつたのださうだ。ところで二郎廟の鐵欄干を入つてゆくと、山門は法式どほり南面してゐる。本殿には「三聖殿」といふ匾額を掲げ、殿内は主神二郎爺の左右に關帝と藥王とを配祀する。後殿内の祀



東方民俗研究会

岡一九七七b)。

このほか第一号に「東方民俗記事」、第二号に「東方民俗研究会消息」がそれぞれ載せられ、「研究会」の各種事業（研究発表、例会記録など）、会計報告（昭和一八年度）や会員消息などが記されており、「研究会」が当時どんな活動を展開していたのかを把握できる得難い史料である。たとえば、例会記録には毎月の発表題目とその発表者氏名を載せるが、「研究会」の活動の一端を示すものとして、これを以下に書き出す。

- 一九四三年七月…「内蒙古旅行談」山本 斌
八月…「朝鮮の民俗」藤本初徳⁸⁾
九月…「呉橋の芸人」多田貞一
一〇月…「靈童出現譚」直江広治
十一月…「山東の葬式」秦 純乗
「支那の玩具」国府種武
一二月…「運河の話」須藤 賢
「蒙古社会組織」宮川 貢
一九四四年一月…「京劇を通じて見たる中国人の性格」石原巖徹
二月…「支那茶の話」戸塚政慶
三月…「支那民族性」山田 昊
四月…「蒙古の土俗」鳥居きみ
五月…「西藏族及び回紇族の社会」山本 斌
六月…「洛陽民俗調査報告」吉岡義豊
九月…「宝巻と邪教」沢田瑞穂
一〇月…「漢民族の青銅文化」富田 達

この記録を一瞥すれば分かる通り、一九四八年七月から翌年一〇月の間、

『東俗叢』について

ほぼ毎月のように例会が開催され、多彩な顔ぶれによる計一六本の研究発表が行われた。これらは中国を中心としてモンゴルやチベット・朝鮮などの北東アジア諸地域に関する民俗・民族学的発表であり、「研究会」がまさに「東方民俗」を研究する集りであったことを示している。例会記録は、この会が戦時下でも「順調に活動していた」ことの証左となる史料であろう。

以上のように、『東俗叢』は四頁ほどの「ささやかな会報」ではあるが、いままで殆ど窺えなかつた「研究会」の活動の姿を浮かび上がらせる貴重な史料である。既存史料に加え、『東俗叢』所載情報を利用することによって、新知見に基づいた「研究会」の考察が今後は可能になるのではないかと思われる。

付、他の関連史料について

『東俗叢』のほかに「研究会」関連史料はいくつか存在しており、筆者の目撃できた一、二について併せて簡単に紹介する⁹⁾。

一九四三年一〇月三日に北京の東華会館（南池子大街民声胡同）で開催された「研究会」発会式での配布物である『昭和十八年度 東方民俗研究会一覽』（以下「一覽」と記す）が残されており、これも「研究会」に関する基本史料である。『一覽』は先行研究で既に紹介・利用されているが（沢田二〇〇六、王京二〇〇八）、確認の意味で目次を示す。

『昭和十八年度 東方民俗研究会一覽』目次（全一〇頁。一九四三年一〇月三日発行、東方民俗研究会発行、新民印書館印刷）

目次

一、趣旨

二、東方民俗研究会会則

一〜二頁

三、会員名録

二〜七頁

顧問、役員（会長・幹事長・幹事）⁽¹⁰⁾、会員

四、東方民俗研究会幹事会規約

七〜一〇頁

付：東方民俗叢書刊行予定書目

東方民俗研究会入会申込書

『公則』（全七条）および「幹事会規約」（全二〇条）・会員名録（顧問五名、役員八名、会員五五名、の計六一名が記載）などからは、「研究会」

の運営体制やその担い手のあり様がある程度まで復元可能だろう。また、『一覽』

には「東方民俗叢書刊行予定書目」として全二五種の書名が載せられ、「叢書」の刊行計画の全容が判明する⁽¹¹⁾。そのうちの一二種が

選ばれ第一期刊行分として、『東俗叢』第一号および『北京地名誌』などで告知された⁽¹²⁾。

『一覽』は、成城大学民俗学研究所に二部、鳥取県立図書館郷土資料室に一部、それぞれ所蔵されている。三部とも橋浦泰雄旧蔵であり、「研究会」幹事

の多田貞一から橋浦へ送られてきたものである（鳥取県立図書館郷土資料室所蔵「橋浦文書」）⁽¹³⁾。鳥取県立図書館のものには書き込みも認められる⁽¹⁴⁾。

さらに、「研究会」の活動を伝える史料として、展覧会目録がある。それは、一九四三年一月に北京の東華会館で開催された民俗展覧会の目録

（『東方民俗研究会主催第一回民俗展覧会目録』。以下「目録」と記す）である⁽¹⁵⁾。

【図3】この展覧会については、内容の一部を紹介したものもあるが⁽¹⁶⁾、従来その全容を把握することは難しかった。よって、『目録』

の簡単な概要を以下に記す（展示品の明細も記すが、紙幅の関係で省略）。

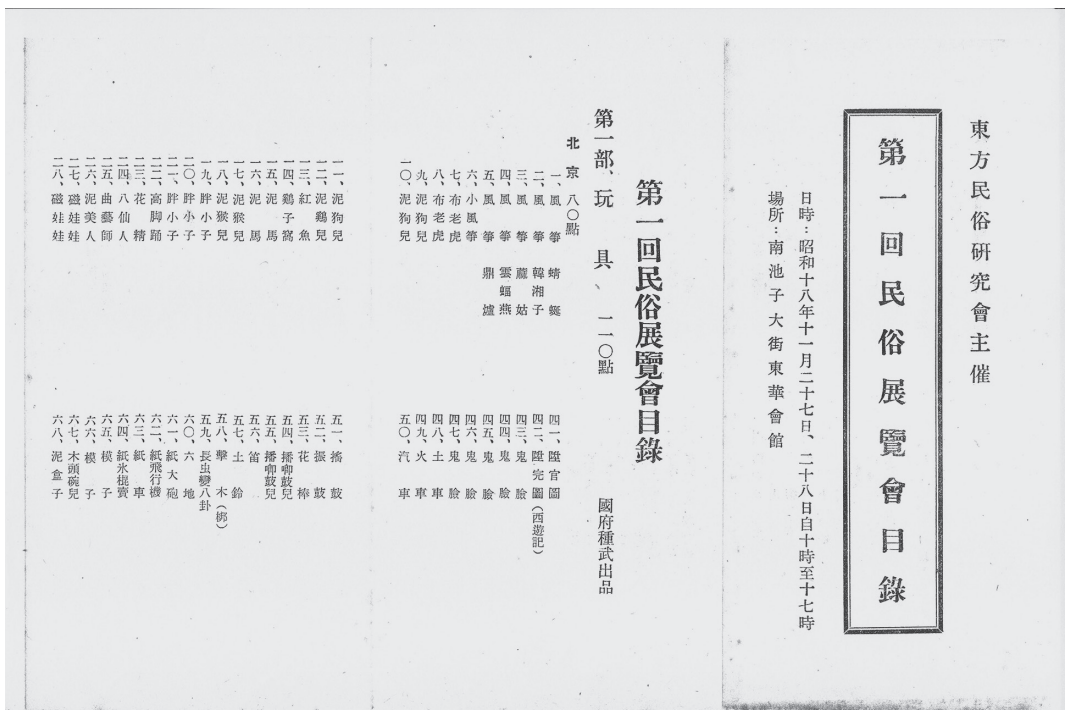


図3 『東方民俗研究会主催 第一回民俗展覧会目録』（成城大学民俗学研究所所蔵）

『東方民俗研究会主催 第一回民俗展覧会目録』（一九四三年一月二七・二八日開催）

- 第一部、玩具 一〇九点⁽¹⁷⁾ 国府種武出品
北京八〇点、保定七点、開封一四点、其他ノ地方八点
第二部、天津皇会図 一〇張 橋川時雄出品
第三部、民俗参考品 二四点ほか 多田貞一・吉岡義豊・直江広治・稻生典太郎・山本斌出品
第四部、宝巻類 二〇点 吉岡義豊出品
第五部、民俗参考資料 九五点 直江広治出品
第六部、民俗写真 華北交通会社資業局出品四五葉、其他会員出品民俗写真約四〇葉

前記の概要から分かるように、展覧会は「玩具」から「民俗写真」までの全六部構成をとり、展示品数は三〇〇を優に超える。第六部を除き、各部の展示品は会員の蒐集物であり、会則第四条（後掲）に謳われている通りの展覧会を実施していたことが分かる。ところで、展覧会の反響はどうだったのかというと、「北京最初の催しであり、異常な反響を呼んだ」という（日本民族玩具協会一九四四）。このように好評を博した展覧会は、つづく第二回も計画されたが、結局開催に至らぬまま敗戦を迎え、第一回の民俗展覧会が「研究会」の主催した唯一の展覧会となった。

四、若干の考察―むすびにかえて―

「研究会」の会則には会で実施する各種事業に関する条文（第四条）

『東俗叢』について

があり、この部分に「機関雑誌」についての記載も存在する（『一覽』一〜二頁）。

四、本会ハ左ノ事業ヲ実施ス

イ、集 会 会員相互ノ連絡、研究ノ発表討論ノ為毎月一回以上集会ヲ開ク

上集会ヲ開ク

ロ、機関雑誌 月刊東方民俗ヲ発行シ会員ニ配布ス

ハ、書籍刊行 東方民俗叢書ヲ刊行ス

ニ、展覧会 随時会員ノ蒐集セル民俗参考資料ノ展覧ヲ為ス

ホ、講演会 民俗研究ニ関スル講演会ヲ開催ス

傍線部のように、機関誌として『月刊東方民俗』の発行が会則で謳われていた。これによれば、『東俗叢』と異なる機関誌発行が当初計画されていたことになる。ではどんな経緯から『東俗叢』の刊行となったのであろうか。最後に、この点について検討する。

前記のイ〜ホの五つの事業のうち、ロを除く他の四つは、何らかの形でみな実施されており、特に毎月の例会開催と「叢書」刊行の二つが「研究会」の主要な事業であった。他方、ロの機関誌発行に関しては、結局実現されぬまま敗戦を迎える。

そもそも、月ごとの例会開催と並ぶ「研究会」の主要事業であった「叢書」刊行は、雑誌の発行が困難なため、出版社から叢書の形態で会員の研究成果を発表しようとして企画されたものだったという（鳥取県立図書館郷土資料室所蔵「橋浦文書」。「研究会」の正式認可（一九四三年七月二日）が下りた当時の北京では、雑誌の継続的な刊行は紙費・印刷費の高騰、印刷所の繁忙などのため、困難を極めたようである。たとえば、この頃当地で刊行されていた日本語文芸雑誌の『燕京文学』（一九三九

年四月創刊)についてみて(以下の記述は、鄒双双二〇一五による)、「北京で雑誌をやるのが、いよ／＼困難なことに気が付く、印刷機の不備、活字の少いこと、植字工が日本語の判らない支那人であることから来る時間的な差、又それに伴ふ校正のむずかしさ、それにかへて印刷所は、どこもかしこも大繁昌である、こんな状態の下では、毎月の印刷が思ふやうにならず、印刷は遅れるのが当然だ」とその編集者が嘆くような状況にあった⁽⁸⁾。そして、月刊誌として出発した『燕京文学』の発行は次第に遅延し、ついには一九四〇年五月の第七号で一時停刊の状況に追い込まれる(一九四一年五月復刊)。こうした戦時中の「外地」北京における出版の困難性のため⁽⁹⁾、「研究会」同人たちは、機関誌発行という事業を会則で掲げつつも、当面は「叢書」刊行による研究成果の発表を中心に行うことにしたとみられる。

とはいえ、「研究会」の動静や会員の研究発表など、内外への恒常的な発信を行うため、会誌発行への要望は依然として高かったであろう。そこで浮上したのが「叢書」の「附録」としての「ささやかな会報」の発行、即ち『東俗叢』の創刊だったように思われる。「叢書」は、一九四四年三月に新民印書館とその出版契約が結ばれ(『東俗叢』一、「東方民俗記事」、同年六月から全二二巻を毎月一冊ずつ出していく予定であった(『燕京文学』一七、一九四四年八月、四九頁掲載の「東方民俗叢書」広告)。よって、各巻の付録として『東俗叢』が発行されれば、おのずと一年間で都合一二号の月刊「会報」が出来あがる。こうした形態なら、会誌発行は「叢書」刊行作業の一環として行え、雑誌を新規に立ち上げ運営することに伴う各種の煩雑な手続・手続をある程度省け、いまだ発行できずにいる『月刊東方民俗』をある程度代替することにもな

る。それは、出版困難な状況で「叢書」刊行と会誌発行をともに実現する、一石二鳥のプランだったといえる。

ただし、この手法にも問題はあった。会誌を「叢書」各巻の付録として発行すると、書籍の刊行遅延のため、会誌発行も必然的に滞ってしまうからである。事実、「叢書」第一巻の『北京地名誌』は当初の予定より三カ月遅れた一九四四年九月刊行であり、第二巻の『白雲觀の道教』にいたっては一九四五年二月までずれ込んだ。これは定期的発行が望まれる会誌にとり不都合であっただろう。そこで、この事態に対処するためにとられたのが、『東俗叢』第二号発行に関する取り扱いだったと考えられる。

第一号が第一巻『北京地名誌』と同月に発行されたことは、前述した通りである。ところが、第二号は、第二巻『白雲觀の道教』の刊行に先立ち、一九四四年一二月に発行された。同号掲載の新民印書館刊行書広告には、同書が「近刊」と記されている。また、第二号の刊記は本冊と同様に一九四五年二月となっているが、既述のように、「昭和十九年十二月発行」の記載が各頁右上にあり、こちらが実際の発行時期を記しているであろう(でなければ、こうした記載を入れる意味がない)。このような異なる刊記の併記は、第二号の発行を、『白雲觀の道教』刊行を待たず、第一号発行の九月からあまり時を隔てない一二月にして先行させると同時に、付録としての体裁も維持した結果といえる。つまり、「叢書」の「附録」という形式を保ちつつも、定期発行の会誌としての実質を優先させる、という方策がとられたのである。

かくて付録の方が本冊に先んじて世に出るといふ奇妙な事態が発生した。そのため、『白雲觀の道教』の付録であるはずの『東俗叢』第二号が『北

京地名誌」に添付されている、といった変則的なケースも出現することになった⁹⁾。こうした事例の存在は、一二月に第二号が発行されて以降、既刊の『北京地名誌』に、本来の付録である第一号ではなく、第二号を折り込んで出荷していた可能性を示唆するだろう。

以上のようにして発行された第一号・第二号だったが、敗戦の結果、「叢書」の既刊二冊が稀覯本と化し、さらに『東俗叢』も「附録」であるがゆえ、本冊から分離して失われたり、たとえ付属していても本冊の一部と見做されたりすることによって、そのバックナンバーは歴史に埋もれていく。創刊を実現させた措置（「叢書」付録としての発行）が、皮肉にも、のちにその埋没を促す一因になってしまったのである。

註

1. 「柳田民俗学」に代表される日本民俗学の「方法論」の特徴は、伝承や慣行などの「地道な採集の繰り返しによって生活習俗の由来と伝播」さらにはその系統づけを目的とする（鶴見二〇〇六c、一〇六頁）研究を行うところにある。
2. 現在「橋浦文書」は、民俗学関連の文書を中心とした成城大学民俗学研究所のものと、橋浦個人関連の文書から主に構成される鳥取県立図書館郷土資料室のもの、の二つに分かれて所蔵されている。「橋浦文書」の来歴・概要については、鶴見二〇〇六aを参照。
3. CINI Bookや国立国会図書館サーチでは、『北京地名誌』を所蔵する機関は検出できない（二〇一六年九月現在）。中国では、中国国家図書館・首都図書館・北京大学図書館などに所蔵されているが、筆者未見。ちなみに、『北京地名誌』には中国語訳がある（張紫晨訳・陳秋帆校『北京地名志』書目文献出版社、一九八六）。
4. 以上は、香川県立図書館ホームページ内の閲覧室案内「郷土資料部

門・コレクション」の解説文による。 <http://www.library.pref.kagawa.jp/kgwlib/doc/sinfo/sinfo.html>（二〇一六年九月二五日アクセス）。

5. 吉岡一九七七a、七頁。真言宗喇嘛教研究所（一九四一年一〇月設立）については、大澤二〇〇八を参照。なお、『白雲觀の道教』は、戦後に吉岡義豊『道教の研究』（法蔵館、一九五二）の第三・四章として収録・出版されたが（のち『吉岡義豊著作集』第一巻、五月書房、一九八九に再録）、これは「著者が日本に送った一冊が遺っていたので」収録が可能になったという（沢田二〇〇六、四三一頁）。また、同書は北京大学図書館にも一部所蔵されているが、筆者未見。
6. 顧問と役員の氏名（一九四四年九月時）は、以下の通り（記載順）。顧問（六名）：石浜純太郎・別所孝太郎・折口信夫・柳田国男・坂本龍起・周作人。役員：会長永井潜、幹事長橋川時雄、幹事（八名）井上太郎・原田正巳・吉岡義豊・多田貞一・直江広治・大中臣信令・安藤更生・沢田瑞穂。
7. 沢田瑞穂の著作目録は、「土地老異聞」なる文章が『東俗叢』第一号に掲載されたと記すが（沢田一九七三）、一号・二号を通じて、これを見出せない。
8. 七月・八月例会について、第二号の「東方民俗研究会消息」では、「内蒙古旅行談」山本斌が八月例会、「朝鮮の民俗」藤本初徳が七月例会とされ、第一号の「東方民俗記事」の記載と逆になっている。とりあえず本稿では第一号の記載に従った。
9. 一九四二年九月頃にタイプ版の東方民俗研究会設立案および会員名簿が作成され、これらは戦後も沢田瑞穂の手元に残されていたというが（沢田二〇〇六）、筆者未見。
10. 顧問と役員の氏名（一九四三年一〇月時）は、以下の通り（記載順）。顧問（五名）：周作人・坂本龍起・永井潜・柳田国男・折口信夫。役員：会長別所孝太郎、幹事長橋川時雄、幹事（六名）多田貞一・直江広治・沢田瑞穂・井上太郎・原田正巳・吉岡義豊。
11. 「東方民俗叢書刊行予定書目」に記される書名と編者訳者は次の通り。1 『蟠桃宮廟市』沢田瑞穂編著、2 『北京地名志』多田貞一著、3 『喇嘛の楽器』

小倉東次著、4『白雲觀』吉岡義豊著、5『支那農民口碑』沢田瑞穂編、6『支那歲時文學』(春夏)橋川時雄著、7『支那歲時文學』(秋冬)橋川時雄著、8『山東民譚集』直江広治編、9『支那の葬式儀禮』秦純乘訳、10『支那の大道芸人』多田貞一著、11『燈・旗』橋川時雄著、12『掃迷帚』(清末の蘇州迷信記)藤村憲一郎訳、13『在裡と在家裡』原田正巳著、14『支那の玩具』国府種武著、15『華北州風俗志』多田貞一編、16『支那の道教信仰』吉岡義豊著、17『支那民譚の型式』直江広治著、18『支那民俗学』沢田瑞穂著、19『北京俗語志』岩村成正著、20『支那の民具』染木煦、21『北京の伝説』直江広治著、22『東嶽廟』沢田瑞穂著、23『蒙古民話』宮川貢著、24『小孩研究』井上本郎著、25『黒狗台』山本成子著。

12. 『北京地名誌』末尾に記される第一期分の書名と編著訳者は次の通り。1『北京地名誌』多田貞一著、2『白雲觀の道教』吉岡義豊著、3『蟠桃宮廟市』沢田瑞穂編著、4『支那農民口碑』沢田瑞穂編、5『支那の葬式儀禮』秦純乘訳、6『支那歲時文學』(春夏篇)橋川時雄著、7『山東民譚集』直江広治編、8『支那の大道芸人』多田貞一著、9『支那の民衆信仰』吉岡義豊著、10『支那の玩具』国府種武著、11『支那歲時文學』(秋冬篇)橋川時雄著、12『東方民俗論考』東方民俗研究会編。第一期書目を、『一覽』『刊行予定書目』と見比べると、いくつかの書名に変更が認められるほか、「刊行予定書目」にはなかった『東方民俗論考』が「叢書」の一冊として新たに付け加わっている。

なお、『北京地名誌』の第一期書目には次のような「東方民俗叢書発刊趣意」が付いている。「所謂東亜新秩序の建設は共栄圈諸民族の大同であると同時に、その単位たる各民族個々の特性と伝統とを活かすことでなければならぬ。大東亜の最広域を占める隣邦中華民国に於いては特に然り。その永い伝統と根強い習俗とは支那民族の生きた現実として、また新しい中国創建の原資材として我々の眼前に横はつてゐる。その特異なる現実の諸相と本質とを正視し別決して把握することが新中国創建の秘鑰であり、大東亜新秩序建設の基礎工作であることは論を俟たない。本叢書を計画発刊し、以て

13. 『一覽』は、本文で触れた三部以外に、橋川時雄も所持していたという(沢田二〇〇六)。

14. 橋浦のものと思われる書き込みが表紙や会員名録にあり、表紙は直江広治の北京の住所などを記したメモ書きで、名録の部分には会員の異動に伴う修正が施されている。

15. 折畳冊子。成城大学民俗学研究所蔵。この『目録』は、直江広治から橋浦泰雄に送られてきたものである(鳥取県立図書館郷土資料室蔵「橋浦文書」)。

16. 日本民族玩具協会一九四四では、この展覧会が次のように紹介されている。

北京第一回民俗展覧会 在北京の東方民俗研究会主催。十一月二十七、八両日。南池子大街東華會館に於て開催。第一部玩具―北京風箏、布老虎、紅魚、泥馬、兔兒翁不倒翁、陞官図以下八十点。保定指人形以下七点。開封泥人、独梁其他十四点。(国府種武氏出品) 北京最初の催しであり、異常な反響を呼んだ。

17. 『目録』は一一〇点と記すが、展示品を数えると一〇九点のため、本文の如く改めた。

18. 引田春海「編輯後記」(『燕京文学』二、一九三九年五月、一〇四頁)。「燕京文学」及びその刊行団体である燕京文学社については、張泉一九九四(第四章第二節)が概述している。

19. 最近、『月刊毎日』(一九四四年一〇月創刊)に関して、石川巧は、「国内で言論活動に困難をきたしていた」ジャーナリストらが、国内に比べて「言論統制の抑圧が及びにくく、かつ「雑誌の出版に必要な材料が」相対的に豊富な北京において、その言論・出版活動を継続する目的から創刊されたのではないかと推論している(石川二〇一六)。しかし、『月刊毎日』は、「大使館の統合方針に従ひ各誌(北京・天津で発行の諸総合雑誌―引用者注)は昭和十九年六月号で廃刊、同十月号を創刊号と」する「華北唯一

の総合雑誌」として生まれたものであり（東亜新報天津支社一九四四、社会文化篇五頁）、その創刊は当局による言論・出版統制の強化の所産だったようにみえる。また、この雑誌が当局の意向で刊行された「華北唯一の総合雑誌」にも拘わらず、「各号」によって紙質や印刷状態に大きな差があるという姿からは（石川二〇一六、二二五頁）、当時の北京における印刷・出版が困難な環境に置かれていたことも窺える。相対的に「内地」よりは物質的に恵まれ統制も弱かったかもしれないが、本文でも述べた通り、北京での雑誌発行もやはり物質的社会的に相当難しかったことは間違いない。

20. そのような例として中国の古書販売サイト「孔夫子旧书网」に二〇一四年四月一日付出品の『北京地名誌』がある。http://book.kongfz.com/20776231619074/?ref=search（二〇一五年二月一九日アクセス）。

【参考文献】

- 石川 巧二〇一六 「徹底検証・月刊毎日」とは何か『新潮』一一三一一
今村与志雄二〇〇六「橋川時雄年譜」今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』汲古書院、所収
- 王 京 二〇〇八 『一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 大澤広嗣二〇〇八 「昭和前期における真言宗喇嘛教研究所の学術活動について」『大正大学大学院研究論集』三二一
- 川村 湊一九九六 『大東亜民俗学』の虚実』講談社
- 沢田瑞穂一九七三 「沢田瑞穂教授著作類別目録」『天理大学学報』八五
——一九六五 「縁起」沢田瑞穂編『燕趙夜話』采華書林、所収
——二〇〇六 「東方民俗研究会のこと―橋川子雍先生回憶の一節」今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』汲古書院、所収
- 鄒 双双二〇一五 「黄塵万丈を彷徨して―日中戦争期の北京における日本

『東俗叢』について

人結社「燕京文学社」について『国文学（関西大学文学会）』九九

多田麻美二〇一五 『老北京の胡同』晶文社

多田貞一 一九四四 『北京地名誌』（東方民俗叢書一）新民印書館

張 泉 一九九四 『淪陷時期北京文学八年』中国和平出版社

鶴見太郎二〇〇六 a 「橋浦泰雄関係文書」の来歴と内容」鶴見太郎編『昭和

十年代における郷土研究の体制化』二〇〇四・二〇〇五年度科学研究

費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、所収

——二〇〇六 b 「橋浦泰雄関係文書」の目録」同右書、所収

——二〇〇六 c 「柳田民俗学の東アジア的展開」末広昭編『岩波講座「帝

国」日本の学知』第六巻、岩波書店、所収

東亜新報天津支社編一九四四『華北建設年史』東亜新報天津支社

直江広治一九六七 「中国民俗学の現況（一）」（初出一九四八）『中国の民俗学』

岩崎美術社、所収

日本民族玩具協会一九四四 「会報」『鯛車』八一―

橋川時雄一九六五 「書後」沢田瑞穂編『燕趙夜話』采華書林、所収

吉岡義豊一九四五 『白雲觀の道教』（東方民俗叢書二）新民印書館

——一九七七 a 「吉岡義豊博士畧年譜」吉岡義豊博士還暦記念論集刊

行会編『吉岡博士還暦記念道教研究論集』国書刊行会、所収

——一九七七 b 「吉岡義豊」著書・論文目録」同右書、所収

【付記】香川県立図書館、鹿児島県歴史資料センター黎明館、神奈川近代文学館、成城大学民俗学研究所、鳥取県立図書館には、資料の閲覧・利用の便を図っていただいた。記して謝意を示す。